

一九五八年十一月十七日月曜日、僕はニューヨーク New York のハーレム Harlem を歩いていた。乾いてよく霽れた寒い日だ。肩を竦め、ダッフルコートの襟を寄せた。

古い赤煉瓦の Apartment に黒い鉄製の外附階段。半地下の部屋の窓の曇りガラスは割れ、寂しい歩道。Times 紙が雨に踏まれ、舗装の上で活字を歪める。何度も塗り替えられた壁は塗装が剥がれ、その上に貼られたポスターが雨に剥がされその上にまたポスターが貼られ名状し難い。Apartment の前の手摺附階段が十一段。阿弗利加系米国人が坐っている。草臥れた檜皮色のソフト帽にマホガニーの古いジャケット、黒いシャツとパンツ、チャコールグレーのタイは緩んでいて、ガーナ・チョコのような色のスウェードの靴、手に小さなブルースハープ BLUES HARP (HOHNER 社製 Ten-Hole Diatonic Harmonica モジユラー構造、ドシエル材コーム) を包む。

リードの震えのひずみは、Cheap で、半音下がった、薄鉄板のような甲高い音と、ぶち壊れたチューバのように低い耳障りな物理音とが、捏ね雑ざったような、揺らぐ不安定なピッチで、鼓膜に当たる不協和ないう。乾き切った、深みもまろみも潤いもない、即物的 SOUND を縁取る區劃の輪郭を崛起と尖突させ、物質的断裂。真夏昼下がりの、気怠い静寂を裂帛する、古蛇口の栓を捻った、唐突な響き。

<https://ssl.xrea.com/sylveeyh.g2.xrea.com/Bluez.mp3>

BLIK 製空缶。まくれ上がった蓋が缶截りの刃で ZAKZAK に截り牽き裂き剥がされていて、ふち ZUDAZUDA の截口ぎらぎら。頸刎られ顛さ磔の骸がごとく叛き仰け反り逸れ販る苧剥ぎがまま。LABEL 『鯡』。

雨しと濡れる飛び石の露路、青竹の『建仁寺垣』、蹲踞の手水に泛かぶ黄色い朽ち葉、数寄屋造りの柿板葺、長石釉に灰混せて白き釉薬をたつぷり塗りそのツラに紅殻で多かく文様がほんのり緋く、膚に景色の侘寂。白志野焼。釉薬の掛からぬ高台はただ焼締られ、土あぢ甚だしくも微妙。傍らに子と存り、蟻腰の見掛做す竹篋の茶杓。

縄文来の鄙びた街道、雨風日照りに晒されて蝕まれ磨り削られ毀たれて、路傍の草に匿される、古き石の道祖神像。

もはや誰からも見られぬコンテンツ（※1参照）、ただ只管實在焉爾已哉。

扱さて扱す、隅すみ寺でらしん心けう經きやうといふ古来尊かんき卷す子ほん本、俯勢仰勢自在に振舞ひ、垂露龍爪巧みを尽くせど、廢墟むなし。仏説と称すも、摩訶般若波羅蜜多心經といふ經、釈迦牟尼斃れ五百年後の御み製つくにしなければ、似非ゆゑ、此こに在りし古紙乾墨。

第伍百廿四代 彝い之の爲い弓て阜ふ飛ひ也や 録しるす

令和廿伍年乙巳きのとみ睦月丙申廿七 旧曆師走廿八 大寒水沢腹堅

参考：※1 <https://ssl.xrea.com/sylveeyh.g2.xrea.com/index7-2.html>